

対象の異なる“かわいい”感情に共通する心理的要因

井原 なみは・入戸野 宏

広島大学大学院総合科学研究科

Common psychological factors underlying the feelings of *kawaii* elicited by different types of objects

Namiha IHARA and Hiroshi NITTONO

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University
Higashi-Hiroshima 739-8521, Japan

Abstract: In Japan, the word *kawaii* (“cute” or “adorable” in English) has become difficult to define because it is widely used for describing various objects. This study attempted to find common psychological factors in the feelings of *kawaii* toward different types of objects. Both male and female university students ($N = 180$) rated their feelings on six 5-point scales after imagining a scene in which they encountered each of four types of *kawaii* objects: objects with baby schema (e.g., infants, baby animals), humans (e.g., women, smiles), inanimate objects (e.g., accessories, sweets), and idiosyncratic objects (e.g., lizards, mushrooms). The scales consisted of two adjectives (“*kawaii*,” “infantile”), two scales of approach motivation (“want to be closer to it,” “want to keep it nearby”), and two scales of nurturance motivation (“want to help it when it is in trouble,” “want to protect it”). Results show that *kawaii* and infantility ratings were correlated with each other only moderately. Partial correlation analyses revealed that higher *kawaii* ratings were associated with higher approach motivation, but

not with higher nurturance motivation, across four categories. The findings were inconsistent with the baby schema hypothesis, which holds that the feeling of *kawaii* is linked with caregiving and protection for the young and the weak. Rather, the results suggest that the scope of *kawaii* is not limited to baby schema and that the feeling of *kawaii* can be better conceptualized as a positive emotion with strong approach motivation.

Keywords: *kawaii*, cuteness, infantility, baby schema, approach motivation, nurturance motivation

“かわいい”, “カワイイ”, “kawaii”という言葉が日本でも世界でも流行している(櫻井, 2010; 四方田, 2006)。“かわいい”という形容詞は, 典型的には幼い子どもや動物に対して使われる。しかし, 現在ではかわいいと呼ばれる対象は多岐にわたり, その範囲を明確にすることは難しい。“かわいい”を対象の属性と考えると, 同じ対象をかわいいと思う人と思わない人がいることや, 同じ対象が状況によってかわいいと思えたり思えなかつ

たりすることを説明できない。そこで、我々は“かわいい”を対象との関係の中で生じる感情（以下，“かわいい”感情）として捉え、行動科学的な検討を行ってきた（入戸野, 2009, 2011; Nittono, Fukushima, Yano, & Moriya, 2012）。

動物行動学者のKonrad Lorenzは、かわいいと感じられる動物の身体的特徴をベビースキーマ (Kindchenschema, baby schema) とよんだ (Lorenz, 1943; 入戸野, 2012)。ベビースキーマには、身体に比べて大きな頭部、前に突き出た広い額などがある。これらをもつ個体はかわいらしく感じられ、周囲からの攻撃を抑制し、接近・養育などの行動を受けやすくなると考えられている (Eibl-Eibesfeldt, 1970 日高・久保訳 1974; Lorenz, 1965 丘・日高訳 1989)。

しかし、“かわいい”と表現されるものの中には、幼さやベビースキーマに関連しないようなものもある。たとえば、老人に対してかわいいという表現を使うこともある (小原, 2006)。また、ファッションとしての“かわいい”もベビースキーマだけでは説明できない。

井原・入戸野 (2011) は、幼さとかawaiiさの関係を探るために、男女大学生を対象とした質問紙調査を行った。インターネットや雑誌、インタビューにおいて“かわいいと感じる対象” (単語または句として記述されるもの) を93項目集めた。166名の大学生をランダムに2群に分け、一方の群には各項目のかわいさを、他方の群には各項目の幼さを5件法 (1: 全くそう思わない-5: とてもそう思う) で回答してもらった。その結果、幼さとかawaiiさには正の相関があるが、その関係性は強くないことが分かった ($r = .50$)。93項目に対する幼さとかawaiiさの平均評定値を用いてクラスタ分析を行い、4つのクラスタにまとめた。幼さとかawaiiさの正の相関は、“高幼い-高かわいい” (6項目, 例: 赤ちゃん, 子ども), “中幼い-中かわいい” (37項目, 例: ピンクのもの, 人形), “低幼い-低かわいい” (16項目, 例: 人体模型, トカゲ) という3つのクラスタによって形成されていた。残りの1つが、幼さの評定値は低いがかawaiiと評定される“低幼い-高かわいい” (34項目, 例: 笑顔, 女性) というクラスタであった。この

結果は、幼さとかawaiiさは関連しているが、幼さとかawaiiさの必要条件ではない (幼さとかawaiiさもないかわいさも存在する) ことを示している。

一方、幼児の顔についての研究では、未熟児よりも正常出産児の方がかわいいと評価され (Maier, Holmes, Slaymaker, & Reich, 1984), 出生直後の新生児より9-11ヶ月齢の子どもの方がかわいいと評価されることが報告されている (Hildebrandt & Fitzgerald, 1979; 根ヶ山, 1997)。これらの知見から、幼さとかawaiiさの十分条件ではなく必要条件でもないと考えられる (入戸野, 2012)。

それでは、“かわいい”という感情は何に関連しているのだろうか。近年, Sherman & Haidt (2011) は、かわいさに対する反応 (cuteness response) を、社会や個人への関心や福祉と結びついた道徳感情として捉える仮説を提案した。かわいいと感じることは、保護や養育に関係するというより、相手に社会的価値を認め、交流しようという動機づけを高めるものであるという。この仮説は、“かわいい”をベビースキーマや幼さ以外の観点から説明した仮説として興味深い。また、“かわいい”を社会的動機に関連した感情として理解しようとする入戸野 (2009) の提案とも一致する。Nittono et al. (2012) は、“かわいい”を強い接近動機を伴うポジティブ感情として捉えた。これらの考えに従えば、“かわいい”感情は、保護や養育のような養育動機よりも、対象に接近したい、近くにいたいという接近動機に関連していることになる。

本研究では、質問紙調査によって“かわいい”感情と接近動機との関係を検討する。さまざまな対象に抱く“かわいい”感情に質的な差があることは直感的に分かる。幼児に対して抱く“かわいい”とアクセサリーに対して抱く“かわいい”は同じではない。しかし、そこには共通して接近動機が含まれるのではないかというのが今回の仮説である。

井原・入戸野 (2011) の結果を参考に、“かわいい”の対象として次の4つのカテゴリを選定した。高かわいい-高幼いクラスタに含まれる“ベビースキーマ”, 低かわいい-低幼いクラスタに含まれる“独自”, かわいさ得点が中程度のものについては“ヒト”と“モノ”の2つに分けた。各カテゴリに属

するかわいいものを回答者にイメージしてもらい、その印象を評定してもらった。対象についての評価項目として“かわいい”と“幼い”，接近動機に関する質問項目として“近づきたい”と“そばに置いておきたい”，養護動機に関する質問項目として“困っていたら助けたい”と“保護したい”を用いた。さまざまな対象に抱く“かわいい”感情に共通する要因として接近動機があるならば，かわいいと感じる程度と接近動機の強さには正の相関があり，その相関は，対象の幼さや養護動機といったその他の要因の影響を統計的に排除した後でも認められると予想した。

方 法

対象者

広島大学の教養教育科目（心理学）の授業を受講した333名に回答を求めた。このうち，同意が得られ，教示に正しく従うことができ，22歳以下で，留学生でない180名（男性86名，女性94名）を分析対象とした。年齢は18-21歳で，平均年齢は18.5歳であった。調査は2011年4月下旬に実施した。

質問紙

次の4つのカテゴリを設定した。

【ベビースキーマ】赤ちゃん，子ども，小動物，ぬいぐるみ，ぷっくりしたほっぺ，うるうるした大きな目，童顔の人

【ヒト】笑顔，元気で明るい人，自分をしたってくる人，女性，アイドル

【モノ】花，アクセサリ，ガラス細工，洋菓子，チェック柄，水玉模様

【独自】多くの人に理解してもらえないとしても，自分にとっては“かわいい”と思えるもの（例：トカゲ，きのこ，ぶさいくなもの，ロリータファッションなど...）

回答者は4つのカテゴリについてランダムな順序で回答した。まず，それぞれのカテゴリに含まれる対象の例を示し，それらのイメージを鮮明に思い浮かべてもらった。カテゴリ名は明示しなかった。次に，操作チェックとして，思い浮かべ

たものを具体的に質問紙に記述し，鮮明にイメージできた程度を5段階（1:全くできなかった-5:とてもよくできた）で自己評価するように求めた。さらに，思い浮かべたものの印象についての6つの質問（“かわいい”，“幼い”，“近づきたい”，“そばに置いておきたい”，“困っていたら助けたい”，“保護したい”）にそれぞれ5件法（1:全くそう思わない-5:とてもそう思う）で回答してもらった。

全くイメージできなかった（5段階の1）と答えたカテゴリのあった回答者や，当該カテゴリ以外のものを記述した回答者は，教示に従うことができなかつたとみなして，分析から除外した。

分析方法

まず，カテゴリによって評定プロフィールが異なるかを検討するために，カテゴリ（ベビースキーマ，ヒト，モノ，独自）×質問項目（6）×性別（男，女）の多変量分散分析（multivariate analysis of variance: MANOVA）を行った。3要因の交互作用が得られたときは，下位検定を行った。検定の多重性を考慮し，有意水準は保守的に設定した（ $p = .01$ ）。カテゴリ間の平均値の多重比較ではBonferroni法を用いて有意水準を調整した（比較ごとの有意水準 $p = .0083$ ）。

次に，各カテゴリにおいて，質問項目間のPearsonの積率相関係数を求めた。また，“かわいい”とそれ以外の項目との関係を調べるために，“幼い”，“近づきたい”，“そばに置いておきたい”，“困っていたら助けたい”，“保護したい”の5項目について，その項目以外の4項目を制御変数とした偏相関係数をそれぞれ求めた。検定の多重性を考慮し，無相関検定の有意水準は保守的にした（ $p = .001$ ）。

結 果

Figure 1に，カテゴリごとの平均評定値を男女別に示す。カテゴリによって評定のプロフィール（パターン）が異なっていることが分かる。カテゴリ×質問項目×性別のMANOVAを行ったところ，3要因の交互作用が得られた， $F(15, 164) = 4.44, p < .001$ 。この結果は，カテゴリによって評

定プロフィールが異なっており、性別もそれに影響していることを示している。性別ごとに、カテゴリ×質問項目のMANOVAを行ったところ、男女ともに交互作用が得られた、 $F(15, 71) = 11.80, p < .001$; $F(15, 79) = 22.90, p < .001$ 。この結果は、カテゴリによる評定プロフィールの違いが男女ともに認められることを示している。さらに、カテゴリごとに質問項目×性別のMANOVAを行うと、モノと独自カテゴリでのみ有意な交互作用が認められた、 $F_s(5, 174) = 12.49$ and $4.31, p < .001$ and $p = .001$ 。ベビースキーマとヒトカテゴリでは有意差がなかった、 $F_s(5, 174) = 1.41$ and $2.09, p_s = .222$

and .069。これは、印象に性差のある対象とない対象があることを示している。

Table 1に、質問項目ごとに行ったカテゴリ×性別のMANOVAの結果を示す。以下に項目ごとの結果をまとめる。

かわいい カテゴリと性別の主効果、両者の交互作用が得られた。カテゴリごとに性差の検定を行ったところ、すべてのカテゴリで女性の方が男性よりも得点が高かった。男女の得点差は、モノ ($M = 1.2$) でもっとも大きかった (他のカテゴリ $M_s = 0.3-0.4$)。

幼い カテゴリの主効果が得られた。多重比較

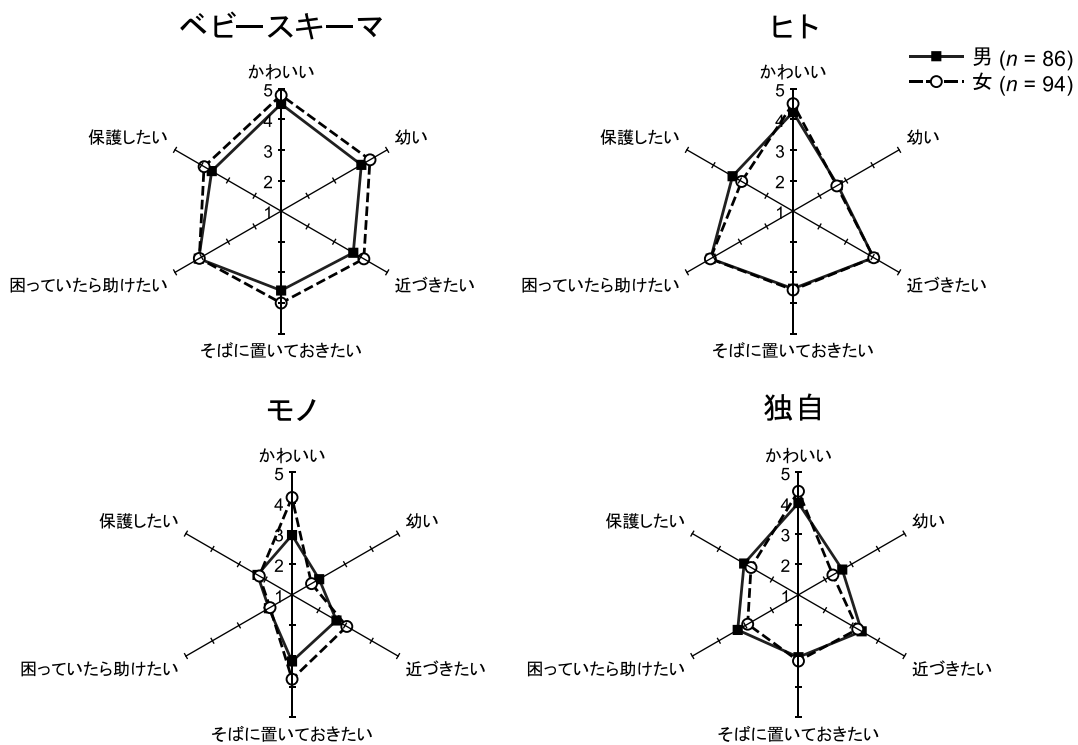


図1. 対象の異なる“かわいい”感情の評定プロフィール

Table 1. 質問項目ごとに行った多変量分散分析の結果

質問項目	カテゴリ		性別		カテゴリ×性別	
	$F(3, 176)$	p	$F(1, 178)$	p	$F(3, 176)$	p
かわいい	40.81	< .001 *	42.92	< .001 *	8.12	< .001 *
幼い	149.40	< .001 *	0.66	.417	3.47	.017
近づきたい	46.27	< .001 *	2.15	.145	3.48	.017
そばに置いておきたい	11.93	< .001 *	6.50	.012	2.13	.098
困っていたら助けたい	216.72	< .001 *	0.98	.323	0.91	.440
保護したい	59.77	< .001 *	0.52	.472	3.56	.016

* $p < .01$

Table 2. 相関分析の結果

	質問項目						M	SD
	1	2	3	4	5	6		
ベビースキーマ								
1. かわいい	-	.32 *	.54 *	.44 *	.36 *	.35 *	4.7	0.7
2. 幼い	-	-	.26 *	.17	.32 *	.39 *	4.2	1.1
3. 近づきたい	-	-	-	.77 *	.40 *	.39 *	3.9	1.1
4. そばに置いておきたい	-	-	-	-	.34 *	.51 *	3.8	1.1
5. 困っていたら助けたい	-	-	-	-	-	.55 *	4.1	1.1
6. 保護したい	-	-	-	-	-	-	3.8	1.3
かわいいとの偏相関	-	.17	.28 *	.04	.11	.04		
ヒト								
1. かわいい	-	.24 †	.40 *	.19 †	.18	.13	4.4	0.9
2. 幼い	-	-	.20 †	.26 *	.09	.43 *	2.7	1.2
3. 近づきたい	-	-	-	.62 *	.59 *	.44 *	4.0	1.0
4. そばに置いておきたい	-	-	-	-	.59 *	.64 *	3.6	1.2
5. 困っていたら助けたい	-	-	-	-	-	.47 *	4.1	1.1
6. 保護したい	-	-	-	-	-	-	3.1	1.3
かわいいとの偏相関	-	.21 †	.35 *	-.05	-.01	-.09		
モノ								
1. かわいい	-	.23 †	.36 *	.40 *	.18	.14	3.6	1.3
2. 幼い	-	-	.11	.00	.44 *	.25 †	1.9	1.1
3. 近づきたい	-	-	-	.61 *	.32 *	.35 *	2.9	1.3
4. そばに置いておきたい	-	-	-	-	.19	.37 *	3.5	1.3
5. 困っていたら助けたい	-	-	-	-	-	.59 *	1.9	1.0
6. 保護したい	-	-	-	-	-	-	2.3	1.2
かわいいとの偏相関	-	.22 †	.13	.30 *	.04	-.11		
独自								
1. かわいい	-	.24 †	.47 *	.38 *	.32 *	.24 †	4.2	1.0
2. 幼い	-	-	.30 *	.27 *	.42 *	.39 *	2.5	1.3
3. 近づきたい	-	-	-	.66 *	.52 *	.53 *	3.3	1.3
4. そばに置いておきたい	-	-	-	-	.43 *	.62 *	3.1	1.4
5. 困っていたら助けたい	-	-	-	-	-	.53 *	3.1	1.5
6. 保護したい	-	-	-	-	-	-	2.9	1.4
かわいいとの偏相関	-	.11	.27 *	.13	.08	-.11		

Note: 単純相関の自由度は178, 偏相関の自由度は174.

* $p < .001$, † $p < .01$

の結果, ベビースキーマ (4.2) > ヒト (2.7) = 独自 (2.5) > モノ (1.9) であった。

近づきたい カテゴリの主効果が得られた。多重比較の結果, ヒト (4.0) = ベビースキーマ (3.9) > 独自 (3.3) > モノ (2.9) であった。

そばに置いておきたい カテゴリの主効果が得られた。多重比較の結果, ベビースキーマ (3.8) > モノ (3.5) > 独自 (3.1), ヒト (3.6) > 独自であった。

困っていたら助けたい カテゴリの主効果が得られた。多重比較の結果, ヒト (4.1) = ベビースキーマ (4.1) > 独自 (3.1) > モノ (1.9) であった。

保護したい カテゴリの主効果が得られた。多重比較の結果, ベビースキーマ (3.8) > ヒト (3.1) = 独自 (2.9) > モノ (2.3) であった。

Table 2に, 項目間の相関係数と“かわいい”との偏相関係数を示す。“かわいい”とその他の項目には, 正の単純相関がおおむね認められた。“かわいい”と“幼い”の相関は低かった ($r = .23 - .32$)。

偏相関分析の結果をみると, 4つのカテゴリで一貫して, “かわいい”は接近動機に相当する項目 (“近づきたい”または“そばに置いておきたい”) と有意に関連していた。養護動機 (“困っていたら助けたい”や“保護したい”) に相当する項目における偏相関は有意でなかった。

考 察

本研究では, 4つのカテゴリの対象をそれぞれイメージさせた状態で, 印象評定を行わせた。その結果, かわいいものに対する印象はカテゴリによって質的に異なること, 性差のあるカテゴリとないカテゴリがあることが明らかとなった。生き物 (ベビースキーマ, ヒト) に対する“かわいい”感情の特徴は男女に共通しているが, 非生物 (モノ, 独自) に対する“かわいい”感情には性差があるのかもしれない。

すべてのカテゴリについて, 女性の方が男性よ

りも“かわいい”の得点が高かった。この結果は先行研究（入戸野, 2009; Nittono et al., 2012）と一致し、女性の方がかわいいものに対して積極的に敏感であることを示している。また、“かわいい”と“幼い”の相関が低かったことは、井原・入戸野（2011）の結果と一致している。かわいいものは幼さだけでは説明できないといえる。

偏相関分析の結果から、“かわいい”の得点は接近動機に相当する項目の得点と相関することが示された。ベビースキーマ、ヒト、独自カテゴリでは“近づきたい”という項目と、モノカテゴリでは“そばに置いておきたい”という項目と相関が認められた。どちらの項目と関連するかは対象の性質に依存すると考えられる。

本研究の結果は、“かわいい”と感じる心理状態には対象によって質的な差があるが、そこに共通する要因として接近動機があるという仮説を裏づけるものである。ベビースキーマをもつ対象であっても、“かわいい”が養護動機ではなく、接近動機と関連していたことは、“かわいい”をベビースキーマに対する反応としてとらえる古典的な枠組みを再考する必要があることを示している。

本研究の限界として、接近動機の種類を区別できなかったことが挙げられる。強い接近動機を伴うポジティブ感情は“かわいい”感情以外にもある。たとえば、空腹時に食べ物に対して感じる感情や性的魅力のある異性に対する感情などがそれに当たる。Sherman & Haidt (2011) は、かわいいものは、対象についてのメンタライジング (mentalizing, 相手に心があると考えること) を促進する手がかりとなり、社会的交流動機を高める役割を果たすと提案した。入戸野 (2009) も、“見守り”や“共存”といった社会的動機に関連したポジティブ感情が“かわいい”感情の根底にあると提案している。今後は、“かわいい”感情に含まれる社会性に焦点を当てることにより、“かわいい”感情の特性がさらに明らかになると期待される。

引用文献

- Eibl-Eibesfeldt, I. (1970). *Liebe und Haß: Zur Naturgeschichte elementarer Verhaltensweisen*. München: Piper. (アイブル=アイベスフェルト, I. 日高敏隆・久保和彦(訳)(1974) 愛と憎しみ: 人間の基本行動様式とその自然誌 みすず書房)
- Hildebrandt, K. A., & Fitzgerald, H. E. (1979). Adults' perceptions of infant sex and cuteness. *Sex Roles*, *5*, 471-481.
- 井原なみは・入戸野 宏 (2011). 幼さの程度による“かわいい”のカテゴリ分類 人間科学研究(広島大学大学院総合科学研究科紀要 I), *6*, 13-18.
- 小原一馬 (2006). 「かわいいおばあちゃん」稲垣恭子 (編) 子ども・学校・社会-教育と文化の社会学 世界思想社 pp. 154-191.
- Lorenz, K. (1943). Die angeborenen Formen möglicher Erfahrung [Innate forms of potential experience]. *Zeitschrift für Tierpsychologie*, *5*, 235-409.
- Lorenz, K. (1965). *Über tierisches und menschliches Verhalten*. München: Piper (ローレンツ, K. 丘直通・日高敏隆(訳)(1989). 動物行動学II 思索社)
- Maier, R. A., Jr., Holmes, D. L., Slaymaker, F. L., & Reich, J. N. (1984). The perceived attractiveness of preterm infants. *Infant Behavior and Development*, *7*, 403-414.
- 根ヶ山光一 (1997). 子どもの顔におけるかわいらしさの縦断的発達変化に関する研究. 早稲田大学人間科学研究, *10*, 61-68.
- 入戸野 宏 (2009). “かわいい”に対する行動科学的アプローチ 人間科学研究(広島大学大学院総合科学研究科紀要 I), *4*, 19-35.
- 入戸野 宏 (2011). 行動科学的アプローチによるかわいい人工物の研究, 感性工学, *10*, 91-95.
- 入戸野 宏 (2012). かわいさと幼さの関係についての実験心理学的考察 日本感性工学会かわいい人工物研究部会2周年記念シンポジウム資料集 pp. 7-10
- Nittono, H., Fukushima, M., Yano, A., & Moriya, H. (2012). The power of *kawaii*: Viewing cute images promotes a careful behavior and narrows attentional focus. *PLOS ONE*, *7*, e46362.
- 櫻井孝昌 (2010). ガラパゴス化のススメ 講談社
- Sherman, G. D., & Haidt, J. (2011). Cuteness and disgust: The humanizing and dehumanizing effects of emotion. *Emotion Review*, *3*, 245-251.
- 四方田犬彦 (2006). 「かわいい」論 筑摩書房